

部落問題文芸作品選集

第36卷

春風樓主人著 藤浪 (後編)

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第三六卷

定価は箱帯に表示

昭和五十一年十一月二十五日発行

発行者 松本富夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二丁目二一五丁152

電話〇三(七一六)六一五一(代表)
(七一三)九二四四

振替 東京 四一七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたしません。

家庭小説
藤

浪
(後編)

春風樓主人

〓
〓

汽車が下關へ着いたのは、翌日の午後二時過であつた。

「釜山行は何時ですかと、岩藏が聞くと、驛員は苗子の方ばかり見ながら『今夜の十時です、汽船は釜山丸』と答えた。

苗子は吻と太息して、僅かの間でも内地に居ることを悦んだ岩藏は、

「仕方がねえな」と呟いて、

苗子を驛前の安宿に連れ込んだ。

「観念しねえよ、足掻いたって駄目だから、警察へ訴へたつて

人に泣き付いたつて、親の連れた娘だアな、誰が何と云ふものか
それよりも親へ孝行した方が、手前の寢覺めも好いッてもんだな

ア、おい」

表二階の電燈の下で、夕餉の膳が退ると、岩藏は鞆を枕に、大
の字に寝轉びながら恚う云つた、苗子は綿の如に疲れた軀を、障
子の根に兀然と据えて倦き勝ちに考えて居たが、衝と顔を反向け
て、腰硝子越しに外面を見入つた。

暗い濱邊に橋頭の灯がちら／＼して漆の様な彦島の此方を、瀬
の早い潮が流れて、見るから物凄しい光景であつた苗子は此處こそ

……と心を決めた。

「おい、お苗、好い加減に諦めねえッてことよ、亭主や餓鬼が欲しきやア、是れから先、五月蠅ほど出来らアな」

岩藏は苗子を下から見上げて、

「美しい女だが、驚れてやがる、子供の時は豊頬した可愛い餓鬼だつたが、近頃見違えるほど痩せたせ、今の内に肉を附けねえちや、大分相場が狂て来い」

苗子は黙つて見向きも仕なかつた。

ぼーッ……と、眠いやうな流笛が浦に響いて、階下の時計が八時を打つた頃、岩藏は流車の疲れで高軒を搔いて居た、苗子は此間にと立ち上つて、腰帯を締め直す、涙が止め度なく頬を流れたやがて、氣を取り直して、襖の外へ忍び出たが、岩藏は氣が付

かなかつた四邊に人はない、もう心安いと思ふので、苗子は梯段を下りて、下駄を突ツかけ、町見物の振で表へ出かけた時、布簾の蔭から女中の聲で、

「お二階のお客さん、お連の御婦人がお出ましになりますよ」と二階を向いて叫び立てた。

ばたくと荒つぽい岩藏の発音が聞えて、階段口から凄い眼が覗くと見る間に、苗子の襟首は毛深い腕に掴まれて、忽ち二階へ引摺り上げられた。

苗子は死ぬにも死ねなかつた。

十時近くなつた頃、宿の女中が漁船の出帆を知らせて来た苗子は岩藏に引ッ立てられて、溢々と旅館を出立ながらも、彌よ内地を離れねばならぬといふ哀愁味がまた新たな涙を誘うのであつた。

驛の構内を抜けて棧橋へかゝるまでに、明るい電燈の下で税關吏の荷物調があつた。

「貴郎の荷物は是れ切ですか」

吏員は岩藏の鞆の中を調べてから恚う訊いた。岩藏は引ッ棄るやうに鞆を取つて、

「目がありや見ねえ」

厭々しさうに吏員を睨め付けて「大事な謄本まで引ッ繰り返しやがつて、何でい」

吏員は見返して

「規則だから詮方がありません」と、唯一言。

「規則？、何が規則でい」

岩藏は立ち留つて肩を聳かした。後から續いた乗客は、流れを

堰かかれた水の様に溜つて、押し合ひ、壓し合ひ、口々に罵り初めた、苗子は躰裁悪く、黙つて、俛いて、岩藏の背後に小さく立ち窘んで居ると、誰やら、左の肩先を軽く小突いた者があつた。何心なく顔を擡げた苗子の眼前に、思ひも初めぬ笠原信子が、片手で胸を擦りながら。

「あゝ、好かつた」と云ひそうな眼許で嬉しさうに苗子を見て微笑んで居た。

『あッ、笠原さん……』

苗子は我れ知らず叫んで、信子の胸に取り縋ると、少時は口も利けず、黙つて、沈と、信子の顔ばかり瞞めた兩の眼から、大粒の、熱い涙がぼろ／＼と轉び落ちた。

信子は、苗子の背中に右手を置き、左手で睫毛の露を拂ひも敢

えず、後ろの、烏打帽の男を回顧つて、眼で、岩藏を指して見せた、烏打帽は早くも頷いて、切と税關吏を罵つて居る岩藏の片腕をむづと捉へ、物も云はず列外へ引き出して、呆れた鼻先へ拘引狀を突き付けた。

「俺は京都の烏居刑事ぢや」

岩藏は眞蒼くなつて、突如逃げ出さうとするを刑事は引ッ捕へて捕縄を打つた。

響動めく群衆、驚く苗子、構内は大騒ぎであつた。

(一一一)

午前九時五十發分の新橋行急行列車が、起點下關驛を發する十

分ばかり前に、驛前のホテルから若い女中に送られて、列車に乗り込んだ青切符の婦人は、信子苗子の二人であつた。引き換へて岩蔵は、待合室から刑事に引ッ立てられ、三等客室へ荷物のやうに放り上げられた。

苗子は信子と並んで、二等室の窓下に腰を下すまで、神の手に絶つた子供の様に、何事も信子の儘になつて居たが、流車が動き出して、可怖い瀬の渦巻が遠ざかると、苗子は俄に悲しい顔になつて、窓から早瀬の方を顧み乍ら

「私は何故、彼の海を遺して來たのでせう……」

信子の膝に片手を置いて、

「降して下さい、私を、流車から降して下さい」

信子は訝しさに眉を寄せて、

「何うか仕たのですか、忘れ物でもあつて？」

「私は、私は……」と、信子の膝に俯伏して「京都へ歸つたつて皆様のお目に掛れる身ではございませぬ、どうか此處で……」

「何ですよ、奥さん」と、信子は心配さうに覗き込んで「貴女には住江さんと涉さんと云ふ方があるぢやありませんか」

「私は、住江の母でも……涉の妻でも……ございませぬ、生きて甲斐ない身の上です、降して下さい、私何うしても……」

信子は唇を噛んで、眼を瞑つて、少時點つて居たが、やがて倍とした聲で。

「御離縁にお成なすつたことは、或者から聞きました、けれどもそれは日柳家で勝手に決めたのです、涉さんから直接にも間接にも、爾んなお話を爲すつたぢやないでせう、住江さんにしても、

失しつれいしながら、彼あんなお姑しゅうごめや小姑こしゅうごめの手てに任まかせて置く理わけには参まゐりませ
ん、奥おくさん、貴女あなたの責せき任にんは、まだく、重おもうござんすよ」

「ですけれど……」苗子なえこは術じゆつなげに「私わたしは世間せけんへ顔出かほだしのなる身み

ぢやございませぬ、私わたしは……私わたしは……」

「其事そのことも聞ききました」と云いつた切きり、信子のよこは太息たいしした、此事このことだけは
慰なぐさめる道みちが無なかつた。

「それが爲ために涉わたる、家出いでしたのだらうと思おもひます、日柳家ひやなぎけを暗くら
くしたのは皆みなな私わたしが悪わるいのです」と、苗子なえこは泣ないた。

「爾なうぢやないでせう」

信子のよこは曖昧あいまいながら口くちを切きつて、

「日柳ひやなぎさんでは誰たれも、貴女あなたの養父やうふさんの事ことを御存ごぞんじぢや無いやう
に思おもひました、私わたしは、貴女あなたがお姑しゅうごさんや、涉わたさんから妙あやな誤解ごかいを

招いて被居るのがお不憫さうでなりません』

「誤解？」

苗子は思はず顔を擡げた。信子は頷いて、

「えい、何と誤解して被居るか、それは云はない方が好いでせう
 兎に角、涉さんの家出は誤解の結果だと存じます、ですから其れ
 は自然氷解つて來ることがあります。涉さんは信行が一生懸命
 に探して居ますから、程なく歸つて居らッしやるでせう、今に御
 覧なさい、雲が晴れて月の映すやうに、貴女の身が明るくなつて
 参ります」

信子の心切な慰めに由つて、苗子の暗い心に、仄ながらも光明
 が映すやうに感じられた、その顔を、信子は沈と見て、

「殊に貴女は、忠義女の竹に對して、京都へ歸るのをお拒みなさ

る事は出きませんよ』

「竹？、女中の竹でございますか」

「竹は貴女が安全な地位にお復りなさるまでは、京都を去らないと云つて、蔭ながら何んなに骨を折つてるでせう。御離縁の事も養父様の事も、恚うして貴女と一緒に歸京れることも、皆、竹の眞心が届いたからです、竹は、貴女の行術を探す爲めに、乞食の仲間にも落ちて野田村へ入り込んで居ましたよ」

「え、ッ……」

「私が貴女に追付けるやうに、今頃は一生懸命になつて、北野天神へ祈願を置めてるでせう」

「ぢや、彼の夜の乞食女が……」

苗子の濃い睫毛は、視る見る間に、感謝の露で美しく濡れそぼ

つた。

斯くして流車は、東へ、東へと上つて行く。來ると歸るとは苗子の身に、大した相違であつた。

(三)

野田村の一軒家は表戸か固く締つて前の畑に鳥が下りて居た、正午の天は鏡のやうに晴れて、簀の小笹も揺れなかつた。

お虎は圍爐裡の椽で、片膚脱いで、立膝でちびり／＼晝酒を呻つて居た。

「お婆さん、お留守ですか」

鳥の羽叩く音が仕て、表口から女の聲が聞えた。お虎は話相手の欲しいところ。

「居るだよ、春戸へ廻らッせい」

足音が横手へ廻つて、開け放した裏口から、顔だけ覗かせたのは、近馴染の女乞食であつた。

「うむ、汝か、婆一人だで遠慮することはねへだよ」

乞食は姉さん冠の古手拭を脱つて勝手の上框に腰を下すと、懐中から竹皮包を出して、

「何か好きな物と思つたけれど、今日はまだ貰ひが少ないから恁んな物を買つて来た、お婆さんは嫌ひぢやないか知ら」

云ひく、鮪の刺身を押し遣つたお虎は早速開けて見て、顔の相好を崩しながら。

「あれ、まあ大好物だよ」

「それは好かつたねえ」